

宮川健郎 私の出会った児童文学者たち 第22回
第5章 古田足日先生
その3 社会にひらく「散文」(上の後半)

昨年(2024年)は、古田足日・田畑精一の絵本『おいしいのぼうけん』(童心社1974年)の刊行50周年だった。私が古田足日先生(1927~2014年)に出会ったのは、『おいしいのぼうけん』が刊行された、つぎの年。私は19歳だった。

おすすめの古田足日

古田先生が亡くなった翌年(2015年)の雑誌『日本児童文学』1・2月号は、特集「追悼 古田足日」だった。表紙は田畑精一さんの絵、特集には、まず、五つの作品論が掲載され、座談会、5の方が執筆した追悼エッセイなどで構成された。

全15ページの座談会は「古田足日 現代児童文学のデザイン」、出席は、西山利佳さんと私、藤田のぼるさんの3人である。この3人は、1993(平成5)年に童心社から刊行された『全集 古田足日子どもの本』全13巻・別巻1の編集協力でもあった。編集協力は、もうひとりの田畑精一さんと、みんなで4人がつとめた。

座談会は、司会をかねた藤田さんのことばからはじまった。「古田足日という児童文学者は実に様々な側面というか、貌をもっていて、なかなか一人が総論を書くのは困難な感じがあります。そこで、今回は、われわれ三人の座談会という形で、古田足日の全体像に迫ってみよう、ということになったわけです。」と述べている。途中、藤田さんの「古田さんの書いたものの中でお勧めというか、児童文学を目指す人たちにもこれは読んでほしいな、というような具体的な話も、少ししていただきたいのですが……。」という、うながしがあった。私は、「まず『ぬすまれた町』、そして『ぼくらは機関車太陽号』、それから『モグラ原っぱのなかまたち』、付け足しで「瑞穂の国ゼロ時間」かな。」とこたえている。

『ぬすまれた町』と「付け足し」としてあげた未完の作品「瑞穂の国ゼロ時間」のことは、この連載でも書いた。『モグラ原っぱのなかまたち』(あかね書房1968年)については、「ちゃんと読んだのは学生時代で、講談社文庫で読みました。東京が、原っぱを失っていく中で町が変容していく、高度経済成長の波に入っていく、そのことをとても鮮やかに書いていると思います。」(注1)とコメントしている。『ぼくらは機関車太陽号』に関しては……。

『ぼくらは機関車太陽号』は七二年、高校生になっていたのも、子ども読者とは必ずしも言えないんだけど、僕らの高校時代というのは、その少し前に高校でも学園闘争があって、その後の時代なんです。だから、その名残りで、職員室と生徒との間が敵対関係という感じで、学校がうまく動かない感じだったんですね。僕なんかは、むしろどんどん職員室に入って行って、教師たちと話をするという風にした。そんな時に『ぼくらは機関車太陽号』を読んだものだから、「あっ、こういうふうにやればいいんだ」みたいな、そういうやり方を教えてくれるというか、大人との付き合い方、社会との向き合い方を教えてくれるような本として読みました。

「校長先生にきいてみるよ」

第5章「古田足日先生」の内容としては大きく逸脱していくのだけれども、座談会で話したことを、もっと具体的にくわしく書いてみることにする。これは、いわば、もう一つの（私の）『ぼくらは機関車太陽号』である。

いまも手もとにある『ぼくらは機関車太陽号』（新日本出版社）は、1972（昭和47）年12月発行の第1刷だ。献呈のサインも短冊もないけれど、これは、たぶん、母が古田先生から送っていただいた本だ。（注2）私も、冬休みに読んだ記憶がある。

私は、そのころ、東京都立三田高等学校の2年生だったが、年が明けた3学期には、何度か職員室へ行って、担任の先生と話をしなければならなかった。2学期のおわりに、3年生になったら、食物Iを履修したいという希望を出し、そのことについて、話さなければならなかったのである。

『ぼくらは機関車太陽号』で、最初に校長室にのりこんでいくのは、ゆかりだ。学年はじめの始業式で、新しい校長先生（日焼けのせいか、色が黒く、チョコレート校長というあだ名になる）が「みなさん、勉強だけがたいせつなのではありません。うんと遊ぶ子になりましょう」と話す。式のあとの5年生の教室で、健三が「ことしは勉強しなくってもかまわない、ということになるんだぞ。」とさけぶ。「ぼっかだなあ」と水を差したのは信彦だ。――「勉強しないんなら、毎日、学校へくる意味がないじゃないか。だいいち、ちゃんと通信ぼがあるんだもん」受け持ちの野上先生にたずねても、何だか腑に落ちない。

「わたし、あした校長先生にきいてみるよ」と言い出したのは、3学期に転校してきた吉岡ゆかりだ。そして、つぎの日の放課後、ほんとうに、ひとりで校長室へ行ってしまふ。高校2年生の私は、職員室に行くとき、読んだばかりの『太陽号』のゆかりを思い出して、ゆかりにはげましてもらっていた。

校長先生は、のりこんでいった、ゆかりに、ただ「きのうはなしたとおりでよ」とこたえる。校長は、「まてばわかるよ」ともいったという。

翌年の春、校長は、乗り物にのらない、歩く遠足を提案する。6年生になった健三たちは、歩き遠足に反対して（交通事故を心配したり、排気ガスを吸いながら歩きたくない、バスのなかで歌をうたったり、楽しくすごしたい）、学級会の決議をへて、クラス全員で校長室へ反対を申し入れに行く。

「やりたいこと」として、えらびとる

1973（昭和48）年春、私は、3年2組の一員になった。3年1組と2組は、私立大学の文系学部への進学を希望している者を中心に編成された。数学Ⅲの授業のないクラスだ。数学Ⅲのかわりに、音楽、美術、書道の芸術関係3教科ないし食物Iのなかから一つをえらんで勉強することになっていた。3年次でのクラス分けの説明会があったのが2年生の2学期がおわるころで、説明会のあとの希望調査に、私は、数学のないクラスに入りたい、そして、数学のかわりには、食物Iをとりたいとこたえた。二つの希望のうち、はじめのほうは、何の問題もなく実現された。だが、あとのほうの希望がかなえられるのは、かならずしも簡単ではなかった。

食物Iをとるためには、1・2年次で家庭一般を履修していなければならない。私は、家庭一般を履修していなかった。1年生のとき、女子が家庭科を勉強してい

る時間、男子は、体育の授業をうけていた。2年生のとき、女子が家庭科を勉強している時間、私たちは、芸術科目の授業をうけていた。それは、あらかじめ決められていることで、選択の余地はなかった。私たちは、体育と家庭科のどちらかをえらぶようにといわれて、体育をえらんだわけではない。2年生のときの担任は、数学の男の先生だった。先生は、どうして食物Ⅰをとりたいたのかとたずねた。私は、家で料理をする機会が多いからとこたえた。

私が高校生のときの、わが家の状況は、第4章「宮川ひろ」にある程度書いた。母は、すでに筆一本の生活に入っていたから、仕事は家でできたけれど、やはり、外へ出る仕事も多かった（講演の仕事がふえていった）。母が留守の日は、おそくとも午後6時までに家に帰り着いて、病気の父のために食事のしたくをする必要があった。それでも、私ができるのは、母がそろえておいてくれた材料を簡単に調理することや、つくっておいてくれたものを温め直すことぐらいだった。私は、食物Ⅰの授業をうけたいと思った。ときどきの食事づくりは、やらなければならないことだったが、「やらなければならないこと」を「やりたいこと」として積極的にえらびとってしまいたかった。

1年生、2年生のときは、芸術科目のうち、音楽を選択していた。2年次の担任は、3年生になっても音楽を選択してはどうかとすすめてくださった。音楽なら、毎学期、5段階評価で4か5がとれている。食物Ⅰを選択した場合は、どんな成績がとれるかわからない。受験する大学には高校の内申書も行くのだから……と心配してくださった。しかし、私には、そのことは、どうでもよいように思われた。私は、私の食物Ⅰの授業をうけたいという希望が、学校のカリキュラムと相容れないものであることを感じていた。

都内のあちこちの高校で学園闘争が行われたのは、それより3、4年前のことだ。私たちの世代が、先輩たちが「学校」についていただいた疑問や不満をもたなかったわけではない。だが、私たちは、先輩たちより臆病だったし、慎重だった。けれど、食物Ⅰの履修だけは何とか実現したいと願っていた。

新学期のうわさ

3年生になってみたら、食物Ⅰの授業に出てよいといわれた。職員会議で、どんな話し合いが行われたか知らない。私の希望とカリキュラムの折り合いをどんなふうにつけてくれたのかも、わからない。会議で、担任が「生徒には、いろいろなことを経験させてやりたい」といってくださったと聞いたのは、高校を卒業してしまってからだ。教えてくださったのは、国語担当の女の先生である。

4月、私は、はじめて食物Ⅰの授業に出た。机の上には、授業の教科書がある。桜井芳人他編『食物Ⅰ』（中教出版1973年）と竹林やゑ子・大山サカエ著『改訂調理実習ノート 応用編』（柴田書店1972年）がのっていた。食物Ⅰの担当は、家庭科のM先生。最初の2回には栄養学の基礎の講義があったが、そのあとは、毎回、調理実習だった。

新学期の学校に、「彼は、大学へは行かずに、コックになるのだ。だから、食物Ⅰをとった」といううわさが流れた。同級生たちは、私のふるまいを奇妙に思って、そんなことばで合理化したのだろう。食物Ⅰの履修の希望について、担任にはきち

んと説明しようとしてとめたけれど、まわりの友だちには、ほとんど話さなかった。家のような話を話すのが、めんどろだった。私は、単独行動をしたのだ。これは、『ぼくらは機関車太陽号』と大いにちがうところだ。

『太陽号』の校長先生は、健三たちの歩き遠足反対の気持ちを聞き取りはしたが、予定を変えようとはしない。校長室を出たとたん、健三がいう。——「ようし、こうなったら、サクラ神社まで歩いてみて、排気ガスをしらべてやるぞ」仲間がくわわって、日曜日に、6人で自転車で、歩き遠足の道を調べに行く。これが、校長からあたえられた歩き遠足を、自分たちのものとして、えらび直し、実現していくきっかけになった。健三たちの問題意識は、いくつかの事件を経験して、クラスのものとなり、先生たちをふくむ学年全体に共有されていく。

もう一つの『ぼくらは機関車太陽号』

食物Ⅰの受講者は38人、私以外は、全員女子だった。調理実習のときは、好きな者どおし4、5人で班をつくる。Kさん、Sさん、Nさんの3人が私を仲間にくわえてくれた。みんな、しゃべりながら、笑いながら料理をする。私は、女子たちが女子だけでいるときの意外な活発さにおどろいた。

食物Ⅰの授業は、毎週月曜日の3・4時間めにあった。月曜日の昼休みまで、私は、先生をふくめて女性ばかりのなかに男性ひとりという環境をすごす。その日の5時間めは、体育だった。体育の授業は、男女別々に行われる。私は、昼休みをまたいで、今度は男ばかりのなかに入ると、ほっとして、話しかたも、体の動かしかたも、午前中とはちがってくるのだった。三田高校の前身は、府立第六高等女学校である(注3)。戦後、男女共学になっても、女子の数が多く、私の学年の男女比は、男2に対して女3だった。まわりに、たくさん女子がいることには十分なれていたはずなのに、調理実習室では、やはり緊張していたようだ。私は、そういう私自身におどろいた。

第1回調理実習は、砂糖を用いたお菓子。さつまいものあめ煮、落花生の衣かけ、豆板をつくった。ノートを見ると、「主眼点」として、「砂糖の加熱による変化を観察する」とある。第2回は、グリーンピースの炊き込みご飯。「主眼点」は、「炊き込みご飯の水加減、塩加減の勉強」。サケの照り焼き、即席づけ、なめこ汁もつくった。ノートには、「反省と感想」として、「照り焼きのとき、生サケの皮の部分に鉄ぐしがとおりにくくて、こまった」などとあり、その下に、M先生の検印も押してある。第3回は、のりまきといなりずし。さらに、おはぎとみたらしだんご、ミートローフとフルーツみつ豆と和風サラダ、鶏ささみ肉とスイートコーンのスープと蒸しカステラとりんごのあめ煮とつづく。

3時間めがおわった休み時間に、男生徒たちが「おい、宮川」などといって、調理実習室へ入ってくるようになったのは、いつのころからだったか。3年3組の男生徒たちである。3組の教室は、調理室の真上にある。彼らの月曜3・4時間めは数学Ⅲだが、勉強中、いいにおいができて、かなわないという。3組の男子たちは、知り合いのいる班に声をかけておいて、昼休みになると、調理実習の成果のお相伴にあずかりに来る。2学期になると、各班にひとりずつ「お相伴」がつくようになった。M先生も、それを、にこにこむかえてくださった。

女子3人が私を調理実習の班の仲間にしてくれたり、男子たちが調理実習室に

入ってくるようになったりして、私の単独行動は、少しずつ、まわりに共有されていった。『ぼくらは機関車太陽号』の世界にいくらか近づいたのではないか。

2学期から3学期にかけては、蝦仁吐司、芙蓉蟹などの中華料理も、ショートケーキやアップルパイも、お雑煮やおせち料理もなかった。2学期の期末テストは実技試験で、アジを3枚におろすというもの。私は、前の晩、イワシを15尾さばいて、試験にのぞんだ。毎学期の成績は、全部5だった。

もう一つの『宿題ひきうけ株式会社』

1974（昭和49）年3月、高校を卒業した。いくつかの大学を受験して、結局、立教大学文学部へ行くことにした。学部時代に児童文学の批評・研究に出会い、それを専門にすると決めたときには、食物Iの授業に出はじめたころに似た戸惑いに、もう一度、とりかこまれることになる。かつては「女子供」に属するとされた文化にかかわろうとすると、そういうことが起こった。

しかし、それは、少し先のことだ。卒業式の日、私は、1年間の食物Iの授業に感謝して、M先生と握手をした。そうして、三田高校をあとにしたのである。東京はもう、すっかり春だった。

これが私の『ぼくらは機関車太陽号』である。女子のみが必修だった高校家庭科が男女共修になったのは1993（平成5）年、それより20年前の物語だ。（注4）

古田足日追悼座談会に話を戻す。先に引用した私の『太陽号』についてのコメントをうけて、藤田のぼるさんが「きっきの宮川さんの話にも通じるんだけど、」として、劇作家・演出家の鴻上尚史さんのエッセイを紹介している。これは、『宿題ひきうけ株式会社』を収録した『全集 古田足日子どもの本』第7巻の第二部「古田足日らんど」に寄稿された『『宿題ひきうけ株式会社』の勇気』という文章のことだ。こう書き出されている。

『宿題ひきうけ株式会社』を初めて読んだのは、確か、小学六年生の時だったと思う。学校の図書館で、その題名に引かれて、一気に読んだ。

読んだ時の感動は今でも覚えている。なにか、心の中に、熱い柱を打ち立てられたような感動だった。自分で考えること、自分が自分の意志で自立することの可能性を教えられたと思った。

鴻上さんは、私より3歳年下の1958（昭和33）年生まれだ。鴻上さんは、作品に熱狂して、実際に「宿題ひきうけ株式会社」をつくったという。——「この会社は、僕に社長としての才能と人望がなかったので、あっという間につぶれてしまった。が、それでも僕は満足だった。どこかにいる戦う小学生たちの隊列に僕も加わったと思えただけで満足だったのだ。」もう一つの『宿題ひきうけ株式会社』だ。

中学から高校に入っても、この作品は、僕の原風景となった。中学で、厳しすぎる校則に文句を言っている時も、高校で、県内の生徒会を集めて連合会を作った時も、僕の心の中には、いつも、『宿題ひきうけ株式会社』があった。

前回のしめくくり、「古田足日が実作者として獲得していった「散文」は、『宿

題ひきうけ株式会社』などでは、作中の、そして、読者である子どもたちの目を社会にむけて開く役割をはたしていく。」と書いた。古田の「散文」は、実際に小学生の鴻上尚史さんの目を開かせ、勇気をあたえ、高校生の私をはげました。そして、これは、多くの子ども読者のなかで起こったことでもあったはずなのである。(つづく)

(注)

- 1、講談社文庫版『モグラ原っぱのなかまたち』は1981(昭和56)年刊行だから、読んだのは、正確には大学院生時代である。
- 2、今回、この本を読み直して、おしまいの方に数か所、母が波線や二重丸のしるしをほどこしていることに気がついた。母が独特の観点でこの作品を読んだことがうかがえる。前回の宮川ひろと古田足日の対比の議論を補足する材料になりそうだが、くわしくは述べない。

この連載では、全集のある作家の作品は全集から引用するのをルールにしているのだけれども、上記のようなこともあるので、『ぼくらは機関車太陽号』の引用は、1972年の新日本出版社版によることにした。

- 3、東京府立第六高等女学校は、1923(大正12)年創立。いわさきちひろさん(1918~74年)や、いぬいとみこさん(1924~2002年)は卒業生である。

私は、1967(昭和42)年に導入された都立高校の入試制度「学校群制度」の4期生で、第11群(九段高校/日比谷高校/三田高校)を受験した。受験生は、入学したい学校をえらべない。たまたま配属された学校に入学することになる。

- 4、食物Iを履修したことは、以前にも一度書いたことがある(宮川健郎「月曜3・4時間め 調理実習室で ぼくの家庭科体験」『技術教室』1987年3月)。今回も、この文章と内容が重複する部分が多いことをおことわりする。この文章の掲載誌は、産業教育研究連盟編集、民衆社刊行。私の最初の勤務先である宮城教育大学につとめはじめたころ、家庭科教育担当のU先生に食物Iを履修したことをお話ししたことがきっかけになって、U先生の仲介で寄稿したものである。